

高校生の地域(貢献)活動を考える

愛媛大学名誉教授 讃岐幸治

“And so, my fellow Americans;ask not what your country can do for you, ask What you can do your country.”(国があなたのために何をしてくれるかではなく、あなた方自身が、国(コミュニティ)のために何ができるかを考えようではありませんか。) ジョン・F. ケネディー大統領の就任演説、1961年1月20日、米国連邦議会議事堂

最近、高校生が地域に出向き、いろいろな地域活動をしている。絶滅種のアザサの保全に取り組んでいる、小中学生の通学合宿の世話をしている、観光ボランティアとして活躍している、老人ホームなどでお年寄りの世話をしている、地元の資源を使って商品開発をしている、などなど。いろいろな地域活動、ボランティア活動をしている。

かつて地域貢献やボランティア活動が行われていた。しかし、今日のようにそれらが盛んに行われるようになったのは、1995年(平成7年)に起きた阪神淡路大震災からである。約140万もの人が被災地に駆けつけたといわれる。そのときを契機として、ボランティア活動のとらえ方が変わった。ボランティア活動だからといっても、それは、なにも特定の人たちがやる特別な活動ではなく、だれでも気軽に、明るく、楽しく、どこでも取り組めるものだ。当たり前の活動として、だれでも取り組める活動だという雰囲気や風土が生まれてきた。

いろいろな人が地域活動やボランティア活動をするようになった。なかでも高校生の地域活動やボランティア活動が盛んになってきたが、それは、どうしてか。まず高校生の地域貢献、ボランティア活動が盛んになったわけからみてみよう。

I. なぜ、高校生の地域(貢献)活動は期待されるのか。

1) 地域社会の維持・発展のために

一つには地域にとって高校生の活動が必要なものとなっていることだ。地域にはさまざまな問題が起こっている。高齢者の介護、ゴミ処理の問題、郷土芸能や伝統文化の伝承、自然保護、環境保全・美化、リサイクル活動、国際交流、災害における支援活動、学習活動の支援など、生活のあらゆる領域で問題が起こっている。

これらの問題を解決し、住みよい地域にしていくためには、財政上の問題もあるが、いまや行政のみでは難しく、地域住民の参画・パワーが必要だ。なかでも祭りの神輿の担い手、街路樹の美化、災害時の避難やガレキの後の片付けなどは、若者の力にたよらざるをえない。彼らがいなければ、地域社会の存続維持すら難しいところも多い。地域

が高校生に期待し、彼らの活動を必要としている。

それだけでなく、高校生は、おとな世代と違って、社会の慣例やしきたりなどにとらわれることなく、社会の問題・矛盾を客観的にとらえ、どうすればいいか、あるべき社会を考え、構想することができる、そんな立場にある。ユニークな視点から発想でき、おとなではできない、ユニークな地域づくりや独創的な商品開発など、先駆的な開拓的な活動ができる立場にある。高校生に高校生ならでのユニークな活動を行い、地域に新しい風を起こしてほしい。そんな思いや願いが強まり、彼らの活動を期待し、頼りにするようになってきたことによる。

2) おとなの社会に入っていく準備として

もう一つは、おとなになるために必要な活動としてである。子どもからおとなになるということは、つくられる側からつくる側へ、育てられる側から育てる側へ、世話される側から世話する側へとようになっていくことだ。そのためには、どういう道筋をたどればいいのか。子どもは、おとなになるためには、おとなの中にまぎりながら、おとなや同僚の仕事ぶりを見聞きし、手伝ったりしながら、他人の世話にならずに自立できる力を身につけるとともに、すすんで他人のために働こうとする積極的な意志と能力を持つようになっていくことが必要だった。

言い換えれば、子どもは、多様なおとなとの交流やいろいろな共同体験を通して、自分にも何かができるのだという自信と、だれもがみんな必要な人間になることができることを、体験を通して理解し、さらに全体のなかで自分がどんな役割と責任を担えばいいかを理解し、それを実際に担えるようになったとき、はじめて成熟したおとなの社会に入っていけたのである。(注1)

ところが、現在のわれわれの社会は、若い世代を同年齢のものだけからなる不自然な社会に閉じ込め、彼らがおとなの生活に参加し、おとなとして処遇され、おとなの自覚がもてるようになる時期を遅らせ、成熟したおとなになりにくくしている。そうしたなかで、地域活動やボランティア活動は、おとなの社会にかかわりながら、「自分にも何かができ、他人の期待に応じて役に立つことができる」という、おとなとしての条件である有能性と責任性を身につけ、おとなになるために必要な活動になっている。おとなになるための準備に必要な活動としてである。

3) 豊かな学びの機会・場として

最近の高校生は、自尊感情が低い、人との関係づくりが下手だ、また相手の立場に立って考えることができない、とよくいわれる。それに対して地域活動やボランティア活動をしている高校生たちは、さまざまな問題に対して、それらを自分の問題としてとらえ、多様な人たちと協働しながら解決にあたっているためか、自尊感情や社会的有用感、コミュニケーション能力が高い。生きる力を培う活動として必要な活動だ。

また、地域貢献やボランティア活動をするということは、地域や他者が抱えている課題を解決するために、これまで習得してきた知識や技術、あるいは経験などを総動員して取り組んでいくことになる。これまで学習してきた成果を応用・発展させることになる。知の総合化を図っていく活動として重要だ。

さらにそれは、他者や地域とかかわることを通して、もう一人の自分を発見したり、世の中の矛盾や問題を発見したり、あるいは生きることのすばらしさを発見したり、生きている証を確認したり、「必要とされる自分」を発見していくことになる。人間としてよりよい生き方を探し求めていくことになる。

地域にとっても高校生にとっても、地域活動やボランティア活動は大事な活動だということになれば、高校としても、それを無視するわけにはいかない。そういうことで、かつては高校といえば、地域から浮いた存在だったが、今や、高校生の地域活動を推進する方向で、多くの高校が「地域に開かれた高校」へ、「地域に根ざした高校」へ、さらに「地域とともに歩む高校」へ変わってきている。

Ⅱ. 教育活動としてボランティア活動の導入は可能か。

1) 地域(貢献)活動とボランティア活動

これまで地域(貢献)活動、ボランティア活動が何を意味するか、それらを定義することなく、これらの用語を使ってきた。それというのも、活動している当人は楽しみで活動しているが、その活動が第三者からみればボランティア活動となっている。たとえばバンドを組んで老人ホームなどで音楽活動をしている。当人たちは、そこを会場として練習を兼ねながら演奏活動をしているつもりだが、それは老人ホームの人たちのために行われている活動と見ることもできよう。

第一、人はどうしてボランティア活動をするか。その動機をみても、一つには精神的存在として、他者の不幸や災難、社会の困難や矛盾に触れたり、見聞きしたとき、いたたまれない気持ちになり、何とかしなければと慈愛的に働きかけていくであろう。もう一つは、主体的な存在として、だれしも自分を表現したい、自己実現したいという思いがあり、他者や社会の役に立つものなら、自分の持ち味、特技、経験などを役立て、活かそうとする。さらには、社会的存在として、社会の構成員の一人として、他者や地域のために働くこと、自分でできることをやるのは当たり前だとの思いから活動する場合がある。このようにボランティア活動の動機からして、さまざまである。

したがって、ある活動をボランティア活動とみるか、自己表現活動とみるか、貢献活動とみるか、一概には決めかねる。しかし、以下の論をすすめるために、ここで一応定義しておくことにする。

最も広いのが地域を舞台に行われる体験活動一般を地域活動と呼ぶことにしている。

そして、それら地域活動のなかで「他者や地域のために行う活動」を「地域貢献活動」(奉仕活動)と呼ぶことにする。そして、他者や地域のために行う活動である地域貢献活動のなかで、自発的・自主的な地域貢献活動を「ボランティア活動」と呼ぶ。別の言い方をすれば、ボランティア活動とは、「自発的・自主的な地域貢献活動」と呼ぶことにする。三つの活動をこのように関係づけておくことにする。(図1参照)



2) ボランティア活動と学校教育 —他律から自律へ—

世の中には環境問題、介護の問題、安全や災害防止の問題、さまざまな問題が横たわっている。それらを見過ごすわけにはいかない。精神的存在として、主体的存在として、あるいは社会的存在としてであれ、それらの課題に取り組んでいく必要がある。

それは、「他者や社会のため」になるだけでなく、「自分のため」にもなることだ。ウィストン・チャーチルがいうように、「われわれは何かを得ることによって生計をたてることができる。だか、われわれは何かを与えることによって人生を生きることができるのだ」。高校生のためにも、ボランティア活動を体験させたい。部活動でいい、学校行事でもいい、授業の一部としてでもいい。学校教育として生徒たちにボランティア活動を体験させたい、そういう願いが強まってきた。

しかし他方、ボランティア活動を教育活動として取り入れるとなれば、生徒の意思にかかわらず、それを一斉に強制的にやらせることになる。それでは自発性、自主性を基本とするボランティア活動の精神を歪曲してしまうことになるのではないか。ボランティア活動を学校の教育活動として導入することは無理だ、こういう疑問なり、批判が起ってきたのである。どうするか。

確かに学校は、生徒の意思にかかわりなく、カリキュラムや時間割にしたがって、決められた内容を強制的に教え込んでいる。生徒は、数学が嫌いだからといって、数学の時間をサボるわけにはいかない。国語の時間に運動場に出てサッカーをするわけにはいかない。生徒にしてみれば、自分らの意思を無視して、いやなことでも、決まっているから、必要だからということで、スケジュールにしたがって、強制的に一方的に学ばされる。学校では好きなことを好きなようにすることは許されない。そこでは強制的、他律的な学習が行われる。そういうところで自発的、自主的な活動であるボランティア活動を取り入れるということは、無理なことだというわけだ。

このように学校では、生徒の意思にかかわらず、強制的・他律的に学習させられるが、だからといって、いつまでも強制的、他律的な学習がつづけられることを願っているわけではない。嫌いな勉強であれ、それをすすんでやるようにするところが学校だ。つまり学校は、強制的・他律的な学習を、自主的、自律的な学習へと転化・発展させていく。ここに学校教育の本来の役割があろう。

では、嫌々している学習を、どのようにして自らすすんで学習するようにしていくのか。他律的・強制的な学習を、どのようにして自発的・自律的な学習へ転化・発展させていくのか。それには、大きくいって三つあろう。

一つは学習が自分の利益になると意識づけることである。「手段としての学習」を意識させるやり方で、たとえば数学は嫌だが、いい点をとれば小遣い銭がもらえるという場合、小遣い銭をもらうという目標を達成させるために、その手段である数学の勉強をするうちに、数学自体が面白くなり、すすんで数学の勉強をするようになるというものである。さらに自分の利益のためではなく、他者や地域の幸せや利益のために、それを実現するために、手段としての学習をしていくうちに、嫌であった学習が次第に面白くなり、すすんで学習するようになる。こういうやり方がある。

一つは「習慣としての学習」、つまり強制的に嫌々やっていたことでも、それが習慣化することによって、それをすすんでやるようになるというものである。歯磨きや手洗いにしろ、最初は強制的、他律的にやっていたことでも、やり続けていくうちに、やらないと違和感を覚え、不快になり、罪悪感を持ち、落ち着かなくなる。やることが自然になってくる。他律的、強制的な学習でも、それを習慣化することによって、やるのが当たり前となり、自らすすんで学習するようになるというものである。

一つは「遊びとしての学習」と呼んでいい。学習は本来面白いものである。好奇心、想像力、表現力などをともない、新しい発見、新しい世界、面白い世界を切り開いてくれるものである。そこで学習を遊び化し、楽しいものへ転化させることで、すすんで学習するようになるやり方がある。(注2)

以上みたように、学校は、強制的、他律的な学習を、自発的、自律的な学習へと転化・発展させる場所といえる。この考え方に立てば、最初は強制的、他律的にすすめられる他者や地域のために行う活動である社会貢献活動を取り入れるが、それを手段化、習慣化、遊び化の方法を通して、次第に生徒たちが自発的、自律的に他者や地域のために行う活動、つまりボランティア活動をしていけるようにすることはできよう。

3) 準備段階としてのボランティア学習

学校としては、本来の意味でのボランティア活動そのものを取り入れることは無理だが、他者や地域のために行う貢献活動を体験させながら、次第に生徒自らが自発的・自律的にボランティア活動できるようにしていくことはできよう。

そこで、ボランティア活動を学習していくための準備活動という意味をこめて、貢献

活動を「ボランティア学習」と呼ぶことにし、それを学校教育に取り入れることにしたのである。つまり、「ボランティア活動に対する意欲や関心を高め、それに必要な資質・能力などの育成をめざして、学校の内外で意図的また、制度的に設定して行われる社会貢献型の体験学習」を「ボランティア学習」として学校教育に導入し、青少年がボランティアとして活動していくために必要な資質・能力を身につけていくための体験学習としたのである。(注3)

具体的には、生徒たちが社会福祉体験、伝統文化の継承、人権問題や環境問題、地域づくりなどの課題に取り組むを通して、それらの課題を自分の課題として感じ、それらを解決するための知識やスキルを身につけ、自主的に行動できるボランティアとなることを目指すものとして、学校教育のなかに取り入れることにしたのである。したがって、学校でボランティア活動と呼ばれるものは、厳密に言えばボランティア学習として取り入れられているものである。(図2参照)



図2

Ⅲ. ボランティア学習の構造と展開

1) 体験の内面化こそ大事

ボランティア活動ができるようになるためには、ボランティア学習が必要だからといって、ただ社会貢献活動をさせればよいというものではない。体験させればよいというものではない。ボランティア学習をすすめるのは、それを通して、自らすすんでボランティア活動を行うような主体になっていくためである。体験を内面化させる必要がある。

では、どういう体験をさせればいいのか。「われわれ一人ひとりには、なにかの出来事に出会ったからといって、それがただちに、われわれの生の全体性に結びついた経験になるわけではない。」「なにかの重大な出来事に出会ったとしても、ほとんどなにも刻印を残さないような経験もある。つまり内面化されることもない、うわの空の経験というものがある。」(注4)

体験が単なる出来事でおわるか、それともそれが内面化され、生き方の一部に繰り込まれるかどうかは、他者や社会にどう「かかわったか」にかかっている。どんな問題で

あれ、それを「他人の問題」と片付けずに、ある種の切実さを感じて行動することが重要なのである。「人間が他人に対してつねにたんなる傍観者としてふるまうことができるかどうか、あるいは、共に悩む者、共に喜ぶ者、共に罪ある者であるかどうかは、決定的な違いである。後の者だけが、本当に生きている人間である。」(注5)

体験が単なる体験で終わることなく、それが内面化されるのは、自分で、自分の体で、抵抗物を受けながら、活動し苦しんだときであり、そのときはじめて体験は内面化される経験になるといえよう。「ここで『自分で』というのは、他律的にあるいは受動的にではなく、自分の意志で、あるいは能動的にということである。次に、『自分の体で』ということは、抽象的あるいは観念的にではなく、身をもって、身体をそなえた主体としてということである。そして最後の、『抵抗物をうけながら』というのは、環境や状況に簡単に順応して、いわば現実の上を滑っていくのではなく、現実が私たちへの反作用としてもたらす抵抗を、私たちを鍛えるための、また現実への接近のための何よりのよすがとして、ということである。」

体験が生きる力として内面化するのは、このように「能動的に」、「身体をそなえた主体として」、「他者からの働きかけを受けながら」振舞ったときである。(注6)

したがって、ボランティア学習をすすめるにあたっては、つねに体験ごっこに終わらないように、少なくとも基本的な心得として、

- (1) 目的をはっきり理解させる、
- (2) 与えられた仕事に責任を持つようにさせる、
- (3) 自らも学び、かつ向上発展していく、
- (4) じっくりと活動を振り返える、

ようにしていくことである。

2) ボランティア学習が培う資質・能力

ボランティア学習は、どのような資質・能力を育成していくのか。具体的には、つぎの四つ力を育成することをめざしている。

(1) それは、地域や他者が思い悩んでいる問題、課題を探り出し、それを解決するためにどうすればいいか、いやより積極的に地域や他者の幸せのためにどうすればいいかを探り、解決策を見出し、新たな価値の創造に取り組んでいくことを通して、課題の発見・解決能力の育成、つまり探究力(research)を培っていくことをめざしている。

(2) それは、地域や他者の立場を理解し、その身になってものごとを見たり考えたり

することを通して、他者認識を深め、他者への共感能力を育成し、他者と共に生きる力、相互扶助の精神を育成していく。互惠力(reciprocity)の育成をめざしている。

(3) それは、個人的な利害を超越して、社会の改革や変革をもとめて、あるべき公共社会を構想し、その建設のためにどう生きていけばいいか、社会の構成員としての自覚と責任を培う。責任力(responsibility)の育成をめざしている。

(4) 最も大事なことだが、それは、ボランティア活動のもつ自発性・自主性を基本に据えることで、のびのびと自己を解放し、あるがままの自分を取り戻し、新たな自分を見つけ出していく活動として、生きるようとする熱気、元気(refreshment)を培う。

ボランティア学習は、3Rs とともに必要とされる、新たな学力ともいうべき四つの Rs の育成をめざしている。

3) これからの課題として

高校生の地域貢献活動の、ボランティア学習をより推進していくためには、一つには、その意義と目的を教師たちが共有していくこと。二つには、その評価をどうするかをはっきりさせていくことである。三つには、救援的な援助的な活動を大事にしながらも、高校生でなければならない開発的、創造的な活動がより活発になることである。四つには、活動がマンネリ化しないように、できるだけ他の学校との交流、世代や地域を、あるいは国を越えての交流を深め、活動の広がり高まりを持たせるようにしていくことが望まれる。

注 1. ランゲフェルド, M. j. 岡田渥美、和田修二監訳「続* 教育と人間の省察」(玉川出版社 昭和 51 年 124-126) 頁

注 2. 新堀通也「サバイバルのための教育」(広池学園出版部 昭和 63 年 295-297 頁)

注 3. 讃岐「生涯学習社会教育実践用語解説」(全日本社会教育連合会 2002 年 162 頁)

注 4. 中村雄二郎「臨床の知とは何か」(岩波新書 1995 年 63 頁)

注 5. 中野孝次「人生の実りの言葉」(文芸春秋 2002 年 213 頁)

注 6. 中村雄二郎「哲学の現在」(岩波新書 1978 年 122 頁)